

西宮ロット・エ・ガロンヌ交流市民の会

2014年7月23日 Vol.123 発行者:森田正樹 編集:広報部
〒662-0911 西宮市池田町11-1 フレンテ西宮4F 秘書国際課内
TEL:0798-35-3468 FAX:0798-32-8673 Mail:info@nleg.net

フランス美術あれこれ(7)

森田正樹

ルオー Georges Rouault 1871年5月27日～1958年2月13日

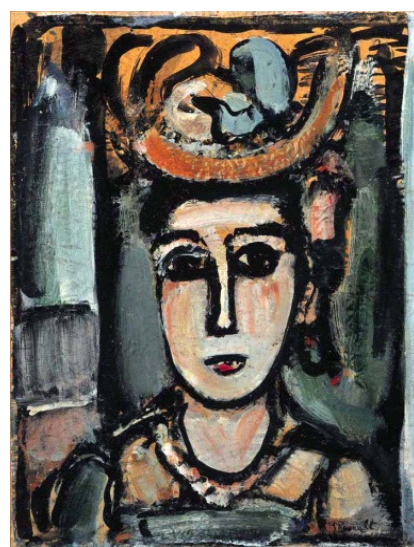
パリ・コミューンの市街戦のさなか、家具職人の息子として生まれたルオーは、1885年から装飾美術学校に通うかたわら、ステンドグラス職人の見習いとして働きます（黒く太い輪郭線はステンドグラスの影響か）。

1890年エコール・デ・ボザール（国立美術学校）に入学し、マティスらと知り合い、象徴主義の画家ギュスターブ・モローに師事します。1902年から翌年にかけて、療養のためフランス西部のオート・サヴォワ地方に滞在し、その頃、初期のレンブラントを思わせる作風から分厚い筆線と深い青色を基調とする作風へと一変します。1903年マティスらとサロン・ドートンヌを創設し、以後毎年出品。カトリック作家レオン・ブロワの影響を受け、水彩やグワッシュで娼婦や社会の下層に生きる人々を描き始めるが、再び油絵に戻り重厚なマチエールで宗教的な主題を描くようになります。1914年頃からは油彩画と併行して連作の版画も制作し、銅版画集「ミセレーレ」（ラテン語の「憐れみたまえ」）はよく知られています。大谷美術館では「ユビュ親父の復活」（1928年、22点組）を所有しています。1930年代に入ると、キリストを描いた宗教的主題とともにピエロ、娼婦、サーカス芸人など社会の底辺にいる人々を多く取り上げ、より静謐な画風へと移行しました。

Georges Rouault

ルオーはいったん仕上がった自作に何年も加筆を続け、納得のいかない作品は決して世に出さない画家で、晩年、「未完成で自分が死ぬまでに完成する見込みのない作品は焼却する」と言い出し、画商のもとにあった300点以上の作品を取り戻し、ボイラーにくべてしまいます。

1923年から約10年をパリで暮らし、同時代画家の作品を100点以上収集した「福島コレクション」で知られる福島繁太郎は、「ルオーは少しも飾り気のない人だった。そして強烈な性格にもかかわらず一面のユーモラスの所がある。もしもルオーのこのユーモラスの一面がなかったなら、精神の過度の緊張のために、とうに其の肉體は破壊されてしまったであろう。」と書いていますが、ルオーの芸術を言い当てているといえます。



サーカスの少女 1938-39年頃
西宮市大谷記念美術館蔵

前に紹介したマリー・ローランサン、キスリングや今回のルオーのほか藤田嗣治などエコール・ド・パリの作家の作品が、現在、西宮市大谷記念美術館で展示中です（8月3日まで）。

避暑がてら涼しい美術館にお越してください。

夏は寒く、冬は暑い美術館。世界中どこの美術館も作品保護のため年間を通じ同じ室温、同じ湿度を保つことになっています、それが守られてないと作品を借りられませんかし、貸出も断ります。日本では重要文化財を展示するときは、22度、60%±5%と文化庁が決めています。大谷美術館も年間を通じ23度55%を維持しています（だから多額の管理費が必要なのです）、ただし作品のある収蔵庫、展示室のみですが。近年よく節電の時代にクーラーを効かせすぎているとお叱りを受けますが、人間のためではなく作品のためなのです。

ですから美術館に行かれるときは、夏は上着持参で、冬はコートの下は薄着で**お**出かけください。

参考文献

開館40周年記念「フランス VS 日本 近代絵画」 2012年

西宮市大谷記念美術館

夢見るフランス絵画展 2014年

兵庫県立美術館

フランス美術あれこれ7 ルオー

(投稿) 「思わぬ再会のプレゼント」

この度のフランス訪問は、Lyonの近く、Ardeche県のFalaise Verte（碧眼の意）禅センターでの接心（座禅）に参加するための旅行であったので、Guillaumeに会えるとは全然思ってもみなかったのだが、出発二日前に偶然FBで彼の写真を見てフランスへ行くことを書き送ったら、すぐに返事がきて「ぜひあいましょう」とのことで、「じゃ、フランスへ着いたら☎するわね」と、あいまいなことであった。Lyonに着いて☎すると、Guillaumeはオランダへ出張とのこと。私は山中で座禅三昧で会うのは無理かなと思っていたのだが、Falaise VerteにGuillaumeから連絡があって、帰りはマルセイユからニースをまわって南フランスから帰る予定になっていたのので、アビニョンで会うことになった。



「アビニョンの橋で踊ろうよ・・・」ではなく アビニョンの橋のもとで待ち合わせになりなんとGuillaumeの結婚式以来の 再会になった。

出会ったときのお互いの言葉は「ひさしぶりー」。

続いて「大きくなったねー」（ほんとに一段と大きくなっていて、横周りが。）とつい言ってしまった。それからGuillaumeの運転で Tarasconn の彼の新しい家を訪問した。玄関に入って部屋に向かい、大きな声で読んでも誰も出てこない！

二人で何度も呼んでいると、ソファの後ろから可愛い頭が、小うさぎのようにピョコピョコ出たり入ったりしている。クスクス……。Clementine（8才）とBaptiste（5才）だ。とってもかわいい。

「せんせーい」（Guillaumeの先生でしたから）と、二人ともとびついてくれ、すぐに仲良しになりました。うちの中を案内してもらい、まるでプリンス、プリンセスのようなお部屋。Guillaumeは子煩悩ですね。その日は、ちょうど「父の日」だったので、パパの部屋には子供たちからの可愛いプレゼントがいっぱい！ しあわせなBeatriceとGuillaumeと二人のこども達のFAMILLEです。

帰るときは、Baptisteと一緒にいくーと泣いてくれました。私にはなく、マルセイユまで送ってくれるパパのGuillaumeについて行きたかったみたい。

もっとゆっくりしたかったのですが、次はしっかりと予定をたてて long sejour できることを願い さよならしました。



横山 豊宥

カランドリエ「傘の季節」

6月から7月にかけて1ヶ月以上の間、日本は梅雨の季節を迎えます。

雨が降ればもちろん家を出るときから傘をさし、曇り空で怪しい時はカバンの中に折り畳みの傘をしのばせますよね。

かわって降水確率 0%のお天気の日、日本の女性の多くは 雨傘から日よけの傘に持ち替えて、やはり傘を手に出かけます。

6月からの日本は数ヶ月の間、しばらく傘持たない日はないかもしれません。

ではフランスでは どうでしょう？

よくフランス旅行される読者のみなさまはご存知かと思いますが、フランス人はなかなか傘をさしません。

特に子どもの傘率はほとんどゼロです。

多くのフランスの幼稚園や小学校では子どもが傘をさすのは危険だという理由で、通学途中の傘使用および学校への傘持ち込みが禁止されている(もしくは過去長い間 禁止されていた)のです。小さな頃からの習慣がそのまま続くのか、それとも日本より乾燥していてすぐに乾くからか、大人になっても、なかなか傘をさすという習慣は根付きません。

傘が一般的でないからか、フランスで売られている一般的な傘の重いこと重いこと。

また、デザインも日本と比べるとイマイチだし、大雨の時はゴルフの時にでもさすような大きな もっさりしたデザインの傘を使用する人も多いです。傘をさすことができない子どもを入れて歩くのに、大きな傘が便利だからだと思います。



加えて、フランスの傘の値段も品質のわりに高いような気がするので、余計おしゃれな傘の購買意欲に欠けるのかもしれませんが。

湿度が日本より低いヨーロッパでは夏の本格的な雨に対してはレインコートを着用します。

子どもの服も大人の服も、夏用ヤッケや冬用コートも、天候が怪しい時はフード付きを着用します。一見フード無しに見える上着でも、襟の中にフードが収納されています。またフードはふんわり被るのではなく、顔の形に沿って小さめで、よりフィットするよう紐でしばれるようになっています。きっちり顔の周りに合わせたフードスタイルは遠目に見るとてるてる坊主のようなシルエットです。



おばあさん達は、ビニールの三角巾をかぶって、雨に応戦しています。日本では、あまりお見かけしない姿なので、初めて見たときはビックリしました。

最初は誰かの工夫かな？と考えていたのですが、無地のビニールや水玉柄のビニールだったり、多少バリエーションがあるようです。小さなよろず屋的な店で、売っているところを見ることがあります。年を重ねたフランス人女性にとって、たとえ体は濡れても、セットしたパーマスタイルは濡らすことができないようです。



お天気のフランスの夏の日はどうでしょうか？

日傘をさしているフランス人は皆無です。

程よい日焼け肌は、夏を楽しんでいるという証しなので、こぞって太陽を浴びています。

但し、皮膚ガンの恐ろしさも浸透しているので、赤ちゃんの時からしっかり日焼け止めを塗り、ダメージが少ないよう、ゆっくり日焼けしていきます。

日焼けマシンのあるお店も日本より多く見かけるくらい、夏の小麦色の肌は歓迎されます。

フランスで日傘をさすのは、日本を含む東アジアからの観光客しかいないような気がします。

フランス人は、家の中は本当に綺麗に片付いているし、おしゃれなインテリアで彩られています。

フランス人の家に感嘆する私は、時々目を疑う光景を目撃するのです。

玄関やそこらで転がっている数少ない傘は、折り畳んだ跡もなく、くしゃくしゃとボタンで止めてありま

す。

そして、その傘たちを見る度、私は黙ってボタンを外して、傘を畳み直して、傘本来の「シュッとした」形に整えたい気持ちにかられるのです。

最後に、傘にまつわる迷信を一つご紹介します。

家の中で傘を広げると、不幸を招くと信じられています。

私は日本人なのでお構いなしに玄関付近に、濡れた傘を広げて乾かしていましたが、フランス人はギョツとしていたようです。

フランス人は家に入るやいなや、一刻も早く傘をしまいたいが為に あんなに乱雑な傘の扱いになるのかもしれませんがね。



この秋、ロット・エ・ガロンヌの友人たちが来日します！

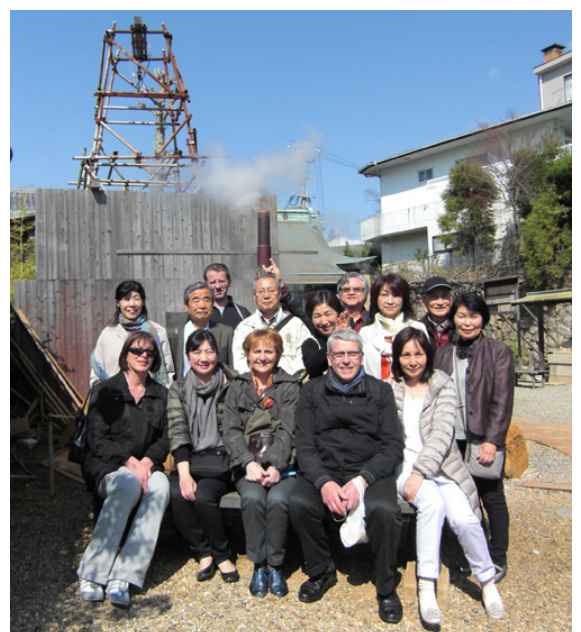
～11月15日(土)は Lot-et-Garonne 交流デー！～

以前よりお知らせしていましたが、ロット・エ・ガロンヌ「西宮の友の会」のマリー・フィトン会長率いる友人たちの一行 10 名が、11月10日(月)～23日(日)の予定で、来日することが確定しました。一行の中には、すでにリピーターとして皆さんともお顔なじみの、カスチヨ夫妻、エリエットさん、マリー・ジョフルさん、そして4月に来たばかりのクリステルさんなども含まれます。もちろんマリー・フィトンさん本人も！

目的は観光ですが、そのうち関西(京都に宿泊)に滞在するのは10日(月)から15日(土)とのこと。

そこで私たちは15日(土)をメインの交流日とすることで、先方の了承もと、計画を立て始めています。

折しも、「西宮の軽井沢」船坂地区ではこの時期、私たちの広報部長池田さんが事務局長を務める現代アートフェスティバル『船坂ビエンナーレ』開催中！田園地帯の景観の中に展示される現代アートのおもしろさに、近年全国的に注目を集めているイベントですが、マリーさんはじめアート大好きなメンバーが多い LeG の仲間とピクニックをかねてビエンナーレに案内します！夕方には西宮市内



に戻り、手作り歓迎会を企画したいと思います。場所は市民会館の会議室を予約済。そこで、会員の皆様にお誘い！

- ① まず、11月15日（土）を今から空けておいてください！
- ② 一部ケータリングも予定していますが、できるだけ手作り感のあるあたたかいパーティーにしたいので、手料理提供者大募集！
向こうのメンバーもフランスの食材をお土産に持ってきて提供して下さるそうです。
- ③ LeGのメンバーの中にミュージシャンがいるので、彼が自分のバンドと共にみんなで歌えそうなシャンソンなどを吹き込んだカラオケテープを持参して下さるとか・・・盛り上がりそうです。
我々のサイドも盛り上がりを2倍にするために、「余興」大募集！
楽器奏者、歌手、マジックやゲームのできる方…手を挙げて下さい！

詳細は9月以降、詰めていこうと思います。とりあえず、何らかの形でみなさまの積極的ご参加をお待ちしています。

ご提案、ご協力お申し出は、e-mail:info@nleg.net または、Fax:0798-32-8673 まで。（佐藤祥子）

西宮船坂ビエンナーレ2014について

佐藤さん、ビエンナーレの紹介ありがとうございました。

私からもちょっとビエンナーレの前宣伝をさせていただきます。

今年のビエンナーレは、10月19日(日)～11月23日(日)の間開催します。

NLeG 会員の皆様おなじみの松谷武判画伯を招待作家としてお招きします。松谷さんのほか、海外5か国から9人の外国人作家と日本人作家17名の現代美術作品を展示する予定です。

日本芸術文化振興会、兵庫県、西宮市、福武財団などからの助成金で運営していますが、地域住民主体の芸術祭ですので、資金不足で悩んでいます。そのため、今年は、入場料として1人500円を頂戴することを決めました。

11月15日にマリーさんたちご一行が鑑賞にお越しいただける予定とお聞きし、大歓迎です。小さな里山の住民手づくりランチも用意させていただく予定です。

NLeGの会員の皆様もどうぞマリーさんたちと一緒にお願いします。



(池田 壱和)